

6 か月～4 歳の小児に対する新型コロナワクチンを含めた予防接種スケジュールについて

2022 年 11 月 21 日

2023 年 1 月 31 日改訂

日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会

1. はじめに

6 か月～4 歳の小児に対する新型コロナワクチンは、2022 年 10 月 24 日から予防接種法上の特例臨時接種として接種が開始されました。これを受けて、同時期に接種することが多い定期の予防接種（以下、定期接種）等を含めた接種スケジュールについて具体的な例を示します。

2. 6 か月～4 歳の小児に対する新型コロナワクチンの接種スケジュール

5 歳以上の小児では、初回接種（初回免疫）の回数は 2 回ですが、6 か月～4 歳の小児では、初回接種（初回免疫）として 3 回の接種が必要となります。なお、皮下接種するその他の定期接種ワクチンと異なり、新型コロナワクチンは筋肉内への接種（筋注）になります。

1 回目接種後通常 3 週間あけて 2 回目を接種し、2 回目接種後 8 週間あけて 3 回目を接種します。通常の接種間隔を超えた場合には、なるべく速やかに接種することになっており、接種間隔の上限はありません。

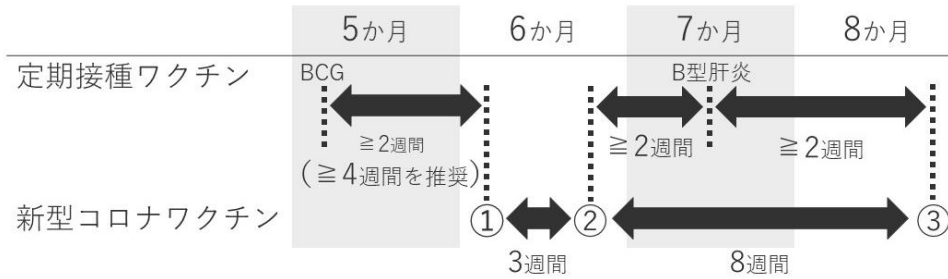
他のワクチンとの接種間隔は、季節性インフルエンザワクチンのみ接種間隔に規定がなく、同時接種を含めていつでも接種可能ですが、その他のワクチンとは、原則として前後 13 日以上の間隔をあけて接種することになっています。

日本小児科学会は、定期接種のワクチンを優先し、それらの接種機会を確保したうえで、新型コロナワクチンの接種をしていただきたいと考えています。

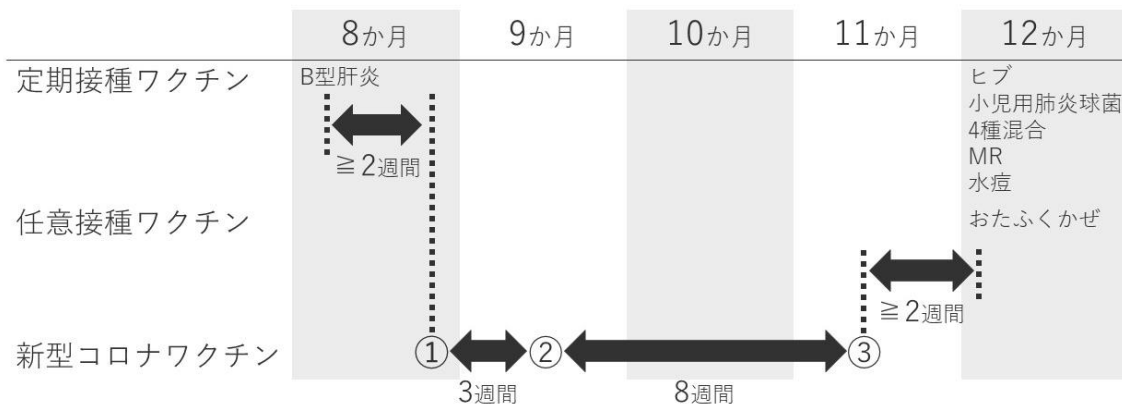
注射の生ワクチン（以下、注射生ワクチン）である、BCG ワクチン、麻しん風しん混合ワクチン（以下、MR ワクチン）、水痘ワクチン、おたふくかぜワクチンを接種した場合は、27 日以上の間隔をおいて別の種類の注射生ワクチンを接種できることになっています。新型コロナワクチンは生ワクチンではありませんが、MR ワクチン、水痘ワクチン、おたふくかぜワクチン接種後 2 週間後頃はワクチンウイルスが体内で増殖する時期であり、新型コロナワクチン接種により免疫干渉が起こり生ワクチンの効果が減弱する懸念や、生ワクチン接種後の発熱、発疹、耳下腺腫脹等の症状が好発する時期を避けることが望ましいとの判断から、可能であれば接種後 4 週間程度は、新型コロナワクチンの接種を避けることが望ましいと考えます。ただし、新型コロナワクチン接種後に生ワクチンを接種するまでの間隔は規定の 13 日以上あければよいものと考えます。また、B 型肝炎、ヒブ、小児用肺炎球菌、4 種混合ワクチンは 0～1 歳で複数回の接種が必要なワクチンですが、同じワクチンを連続して接種する場合、推奨の接種間隔がありますので、前回接種との間隔にも注意が必要です。

以下、接種スケジュールの一例を示します。なお、体調がすぐれない場合は、体調が回復してから接種することが大切です。

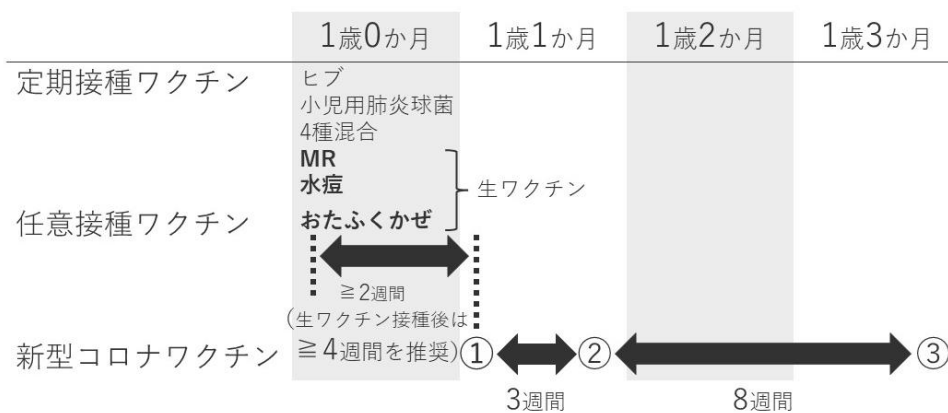
生後6か月の接種例



生後8か月の接種例



生後12か月の接種例



注釈

新型コロナワクチン（mRNA ワクチン）は、2週間以上の間隔でインフルエンザワクチン以外の他のワクチンを接種することが可能。インフルエンザワクチンについては接種間隔の制限はない。ただし、新型コロナワクチン接種に伴う免疫変化が、生ワクチンの効果に影響を与える可能性や副反応が重なる可能性が懸念される。そのため、可能であれば生ワクチン接種後4週間の間隔をあけて新型コロナワクチン（mRNA ワクチン）を接種することを推奨する。

標準的な接種時期

- BCG 5～7か月で接種
- B型肝炎 3回目7～8か月で接種、B型肝炎1回目から20週以上あける
- Hib 4回目 1歳を過ぎたら接種、Hib 3回目から7か月以上あける
- 小児用肺炎球菌 4回目 1歳から1歳3か月で接種、肺炎球菌3回目から60日（2か月）以上あける
- 4種混合 4回目 4種混合3回目から6か月以上あけて接種
- MR1回目 1歳以上2歳未満に接種
- 水痘 1回目 生後12か月から15か月に接種
- おたふくかぜ 1回目 1歳を過ぎたら早期に接種